

怪人二十面相が盗んだもの

― 江戸川乱歩「盗難」を巡って ―

加田 謙一郎

(二〇一六年一月二十九日受理)

キーワード

江戸川乱歩・怪人二十面相・盗難・ドンデン返し・役割反転・立川談志・ミハイール・バフチーン

一. はじめに ― 「盗難」という軽い読み物 ―

短篇小説「盗難」に関する、江戸川乱歩自身による作品解説(注一)は以下の通りである。

【盗難】週刊「写真報知」大正十四年五月ごろの号に発表。どこか落語を連想させる軽い読物である。私は昔から、探偵小説と共に落語が好物であった。両方ともドンデン返しと「落ち」のある点が近似しているからであろうか。この作にはその私の二つの好物が混じりあっているように思われる。

デビュー作「二銭銅貨」を、「新青年」大正十二年二月号に発表。同誌大正十四年一月号には「D坂の殺人事件」を発表。作家として立つ決意を固める転機となった「心理試験」を、同誌大正十四年二月号

に発表。この年、「新青年」編集長であった森下雨村が、新人である乱歩に、同誌への六ヶ月連続の短篇小説掲載の機会を与えた。連続掲載された作品は以下の通り。

「心理試験」(二月号)、「黒手組」(三月号)、「赤い部屋」(四月号)、「幽霊」(五月号)、「白昼夢」・「指輪」(七月号)、「屋根裏の散歩者」(八月増刊)

一見するところ、現在でも名作とされる作品が目白押しである。乱歩自身、「D坂の殺人事件」と六ヶ月連続の短篇小説掲載に関して、以下のように述べている。

その中には「黒手組」や「幽霊」のような駄作もあるが、「D坂」「心理試験」「赤い部屋」「屋根裏の散歩者」などは、私の短篇の代表的なものに属するわけで、この連続短篇はまずまずの成功であった。この年には、「新青年」七篇のほかに「苦楽」(二篇発表、その一篇は「人間椅子」であった)、「新小説」「写真報知」(映画と探偵)などに九篇を書いているから、合わせて十六篇となる。私としてはよく書いた年であり、私の初期の代表的な短篇の半分近くは、この年に発表したといってもいいようである。

乱歩自身が言う「初期の代表的な短篇」群と同時期に、本稿で取り上げる「盗難」は執筆された。デビューしたての初々しくも勢いのある時期に執筆されたもの的一篇であることを思えば、乱歩自身が言うように「どこか落語を連想させる軽い読物」と、簡単には決して片付けられない側面があるはずだ。本稿は「盗難」を読み解くことで、乱歩の「少年探偵シリーズ」のありよう、とりわけ稀代のピカロである怪人二十面相による盗難に関して、できるだけ詳細に論ずることを目的とする。

二. 俗なるものの巢喰う舞台設定

「盗難」は、「私」の「実験談」である。語り手は「私」、語りを聞いている者は、詳細には言及されないが小説家。

「私」は、「この話はこれまで、たびたび人に話して聞かせたことがある」。「そいつがあんまり作ったように面白くてきているもんだから、そりやお前、なんかの小説本から仕込んできた種じゃないか、なんて、大抵の人がほんとうにしない」話だ。「しかし真正銘いつわりなしの事実談」だと、「私」は主張している。

「私」は、現在は「やくざな仕事」をしているらしい。

しかし「三年前までは」、「宗教に関係していた」と言う。「ちょっと立派に聞こえるが「実はくだらないんです」と、「私」は回想する。「あんまり自慢になるような宗教じゃない」が、「七年前」から「足かけ五年」、「××教」の「N市の支教会」に「雑用係り」として働いていた。「むろん私は信者になったわけではない」。「根が信仰心の乏しいところへ、内幕を知ってしまった」だからである。

その「内幕」を体現しているのが、「N市の支教会」の「主任」なる人物である。「私」は、「同郷の者で古い知り合い」の「主任」の「縁故」で、「居候をきめ込んだ」という事情がある。「主任」は「決して宗教的な、悟りをひらいたというようなのではなくて」、「商才にたけていた」人物であった。「宗教に商才は少し変」だと「私」は感じているが、「主任」の「信者をふやしたり、寄付金を集めたりする腕前は、なかなかあざやかなもの」と感心もしている。

とは言え「私」は、「しかつめらしい顔をしてお説教をしている主任が、裏へ廻ってみれば、酒を飲むわ、女狂いはするわ、夫婦喧嘩は絶え間がないという始末では、どうも信仰も起こ」らなかつたのである。それでも、「一時しのぎ」のつもりが、「いっこうに足が抜けなく」なつて、「教会の雑用係りとして、とうとう根をすえてしま」うことになつた。

つまり、「私」も「主任」も、聖なるものであるはずの宗教の「支教会」の中で、最たる俗なるものとして存在しているというわけだ。「主任」は、俗物であり、その「縁故」として「居候をきめ込んだ」

「私」も、「ごろごろしているうちには、だんだん宗旨のこともなれてくる」俗物であった。

この「宗旨」ということばを、「××教」自体の宗旨の意味として受け取るのは、あまりに浅薄であろう。「主任」による「N市の支教会」運営のありようと、それに順応していった語り手である「私」自身を、極めてシニカルに表現しているという側面も、見落としてはならない。「宗旨のこともなれてくる」という表現に注意しよう。聖なるものの「宗旨」に、「なれ」という現象は、本来の宗教的生き方においては、有り得ないと考えられるからだ。「なれ」る現象は、ただ今この瞬間の生き方を問われる宗教的な生き方とは、無縁であるはずだからである。「主任」も「私」も、宗教を食い物にすることに、「なれて」しまったのである。そして、本来の「宗旨」とはほど遠い、俗なる生き方を続けている。ゆえに、「私」は「信仰も起こ」らないまま、「支教会」の中で、俗なるものとして、「いっこうに足が抜けなく」なつて、「教会の雑用係りとして、とうとう根をすえてしま」うことになつたと言える。

三、落語的なドンデン返しに揺らぐ世界

そのような「N市の支教会」に、古くなつた「説教所」の増築問題が持ち上がる。「主任」は「商才」を大いに発揮して、「十日ばかりのあいだに五千円も」、「信者」から「寄付金」を集めてしまふ。

「主任」は、「信者第一の金満家、市でも一流の商家のご隠居」を、「神様からの夢のお告げがあつたなどともつたいをつけて、うまく説き伏せ」、「寄付者の筆頭として三千元」を収めさせる。この三千元を「おとり」として、他の「信者が来るたびに」、「ご奇特なことです。だれだれさんは、もうこの通り大枚の寄進につかれております」と言いながら、「見せびらか」すのだ。かつ「例のまことしやかな夢のお告げを用い」、「だれしも断りきれなくな」るように仕向け、「自分の寄付」を出させるといふ趣向である。「中には虎の子の貯金をは

たいてい信仰ぶりを見せる連中もあ」り、「みるみる寄付金の額は増して行」き、「十日ばかりのあいだに五千円も集ま」ったのである。

ここに聖と俗との狭間を不安気に行き来する、「××教」の信者たち心のあり方が示されている。「おとり」の現金を見せられて、「寄付金」を取めることを「断りきれなくなる」心情は俗であるが、寄進する心に、聖なる心が、若干にせよ、含まれている信者もいることは否定できない。なにしろ、「まことしやかな夢のお告げ」を本当に信じ、寄進している信者がいないとも限らないからである。しかし、そのような聖なる心の中にも、「信仰ぶりを見せる」、という信仰心を競う心が忍び込む。聖なる心による聖なる信仰と、俗なる心による俗なる信仰の狭間に、信者たちの心のあり方が窺える。

前節後半で触れた「主任」や「私」、そして「××教」の信者たちの心のあり方は、聖なるものと俗なるものの狭間で揺れ動く。平常心を保つことができる近代的な市民の視点から見れば、この「N市の支教会」の面々は、極めて非常識な世界の住人と見えるであろう。この世界の住人のあり方は、聖かと思えば俗、俗かと思えば聖、乱歩の言う落語と近似する「ドンデン返し」の繰り返しの様相を帯びている。はるか後年、故立川談志は落語を定義して、「落語とは人間の業の肯定」と言い切っている。

極論すりやあ形式なんざあ何でもいいのだ。

大体演者と観客に共通点がありやあいい。または演者が観客を己の力量で、己の世界に引きずり込めばそれでいい。華麗に語ろうが、トツ／＼と喋ろうが、高い声を出そうが、低くしようが、唸ろうが、何でもいいんだ。客を夢心地にしてくれりやあいい。ただ夢心地になる方法がいろ／＼違うだけである。

ただし我立川流家元は、その夢心地に入れる要素というか、別の注文とでもいうか、その中に「人間の業」という世にいう非常識の世界の肯定をするところに落語の妙があるのだと考えている。徳川三百年、そしてそれを心情的にどこかで引きずっていた明治、大正、昭和の初期まで、それまでの日本の文化にさほどの変化はなかったろう。たとえあっても鎖国されてた日本の中の事柄である。とりあえず安定していた日本人、しかし安定なんざあ

しよせん人間が作ったシステムの上にあるのだから、どこかに当然無理が生じる。それを落語は突つき、笑いにしてきた歴史がある。(注二)

「極論すりやあ形式なんざあ何でもいい」、「大体演者と観客に共通点がありやあいい」という視点は、「××教」側の「主任」と信者たちにもそのまま当てはまる。この場合の「共通点」は「宗旨」である。

「演者が観客を己の力量で、己の世界に引きずり込めばそれでいい」という視点も、同じく当てはまる。「主任」は信者たちを、「己の力量で、己の世界に引きずり込」んだということだ。

恐ろしいのは、次の件の視点である。「華麗に語ろうが、トツ／＼と喋ろうが、高い声を出そうが、低くしようが、唸ろうが、何でもいいんだ。客を夢心地にしてくれりやあいい。ただ夢心地になる方法がいろ／＼違うだけである」という視点。信者を「おとり」で釣って、「虎の子の貯金をはた」かせようが、信仰心を競わせようが、「何でもいい」。夢心地にしてくれりやあいい。ただ夢心地になる方法がいろ／＼違うだけである」と、「主任」の行動の原理を読み解くことが、先の視点を持つことによつて、可能となるからだ。これは、一般社会から見れば、とんでもない非常識かつ反社会的な視点である。

このような非常識かつ反社会的な視点を持つことを可能とするのが、「夢心地に入れる要素」、すなわち「『人間の業』という世にいう非常識の世界の肯定」なのだ。その肯定の背後には、「安定なんざあしよせん人間が作ったシステムの上にあるのだから、どこかに当然無理が生じる」という、人間世界への透徹し切った認識のありようがあるのだ。その認識のありようを「落語は突つき、笑いに」昇華していると、立川談志は説いている。

乱歩が、「ドンデン返し」と「『落ち』のある点」に、探偵小説と落語の近似を見るのは、読者が立川談志の視点に立つことができれば、至極当然のこととして受けとめることができる。乱歩は、極めて正確に落語の本質を理解していたと言える。

ただし、乱歩が書いたのは探偵小説であり、突つっこ対象は落語と共通であつても、「笑い」だけには昇華しない。「笑い」と「不安」

とは紙一重。精神の安定を失う瞬間に生じる点で、一緒である。探偵小説「盗難」の、落語的な世界に、「不安」が忍び込むことになる。

四 犯行を予告する、間抜けな泥棒？

「ある日」、「主任」のもとへ「実に妙な手紙が舞い込」む。「泥棒の予告」であった。その文面は以下の通り。

「今夜十二時の時計を合図に貴殿の手もとに集まっている寄付金を頂戴に推参する。ご用心を願う」

「私」は「ずいぶん酔狂なやつ」と思うが、「よく考えてみれば、ばかばかしいようなこと」ではあるが、「青くな」る。「主任」は、「寄付金は全部現金で金庫に入れて」おき、それを「寄付金」を出させるための「おとり」として、信者たちに「見せびらかしている」ので、「悪いやつのお耳にはいっていかないとも限」らないからだ。「私」は、「こんなわざわざ用心させるような手紙を出す泥棒があるはずはない」と思いながらも、不安を払拭できない。

「主任」は手紙を「いたずら」と決めつけ、「平気でい」る。「私」は、「主任」を説き伏せ、警察へ届けることを認めさせる。警察へ向かう途中、「私」は、「四、五日前に戸籍調べにきて顔を見覚えていた警官」に出会い、「一部始終を話」す。警官は、「私の話を聞くと、いきなり笑い出」し、「おいおい、君は世のなかにそんな間抜けな泥棒があると思うのか。ワハハハハハ、一杯かつがれたのだよ、一杯」と言う。

予告する「泥棒」は「間抜け」。至極常識的な反応をする警官に、「私」は「押して」不安を訴える。警官は、予告された時分に「一度行ってみて上げよう」と、約束してくれた。

現在の読者は、「盗難」の犯行を予告する泥棒から、「盗難」執筆のほぼ十年後、昭和十一年に乱歩によって創造された、犯行を予告す

る稀代の怪盗を思い出すであろう。怪人二十面相である。二十面相の最初の犯行の予告状（注三①）は、以下の通り。

「余が如何なる人物であるかは、貴下も新聞紙上にてご承知である。ろ。」

貴下は、嘗てロマノフ王家の宝冠を飾りし大金剛石六顆を、貴家の家宝として、珍藏せられると確聞する。

余はこの度、右六顆の金剛石を、貴下より無償にて譲り受ける決心をした。近日中に頂戴に参上するつもりである。

正確な日時は追って御通知する。
随分御用心なさるがよろしかろう

というので、終わりに「二十面相」と署名してありました。

文面は物々しいが、「盗難」の犯行の予告状と同一の趣旨で書かれている。異なるのは、作中人物たちの予告状への反応だけだ。

「盗難」に関しては、先に引いた通り、「ずいぶん酔狂なやつ」、「よく考えてみれば、ばかばかしい」、「こんなわざわざ用心させるような手紙を出す泥棒があるはずはない」、「いたずら」、「間抜けな泥棒」といった、予告状を出してきた泥棒に対する侮りと嘲笑であった。

一方、二十面相に関しての作中人物たちの反応はどうか。

その頃、東京中の町という町、家という家では、二人以上の人が顔を合わせさえすれば、まるでお天気の挨拶でもするように、怪人「二十面相」の噂をしていました。

二十面相は、なぜ噂をされていたのか。

東京中の人が、「二十面相」の噂ばかりしているというのも、実は怖くて仕方がないからです。

殊に、日本に幾つという貴重な品物を持っている富豪などは、震え上がって怖がっていました。今までの様子で見ますと、いくら警察へ頼んでも、防ぎようのない、恐ろしい賊なのですから。

「盗難」の泥棒とは異なり、二十面相は「実は怖くて仕方がない」と「東京中の町という町、家という家」で噂される賊、「警察へ頼んでも、防ぎようのない、恐ろしい賊」だと、作中人物たちによって反応されているのである。この反応の違いはどこから来るのか。

「盗難」執筆時、探偵小説というジャンル自体がまだ黎明期であり、市民権を得ているとは決して言えない時期であった。『怪人二十面相』が執筆された昭和十一年とは雲泥の差で、一般社会の探偵小説への理解が十分とは言えない時期であった。

予告する泥棒という作中人物を、大正十四年の一般社会に生きる大人たちが見れば、「盗難」の作中人物たちと同様に、「ずいぶん酔狂なやつ」、「よく考えてみれば、ばかばかしい」、「こんなわざわざ用心させるような手紙を出す泥棒があるはずはない」、「間抜けな泥棒」と受け取られるに違いないと、乱歩が感じていたことは想像に難くない。大正十四年当時の大人たちの侮り、嘲笑を十分に予想し、それを逆手にとって、乱歩は「ドンデン返し」をすることを目論んだ。

昭和十一年、乱歩にとって初めての少年小説である『怪人二十面相』を執筆した際の気持ちも、乱歩自身は以下のように回想（注四）している。

この年の正月号から、といえれば前年の秋ごろから話がきまっていたわけであるが、どういう風のふきまわしか、私は少年ものを書いて見る気になった。もともと、私の娯楽雑誌に書く大人ものは、筋も子供っぽいし、文章もやさしいものが多かったから、少年倶楽部の編集者が、この人はきつと子供ものに向くだろうと狙いをつけたのかも知れない。前々から依頼は受けていたけれど、それほど熱烈な依頼でもなかったの、私もそれほど本気になれないでいたのだが、このころになって、私の方でも、どうせ大人の雑誌に子供っぽいものを書いていくんだから、少年雑誌に書いたって同じことじゃないかという気になったのであろう。

「私の娯楽雑誌に書く大人ものは、筋も子供っぽいし、文章もやさ

しいものが多かった」という自己評価が、「どうせ大人の雑誌に子供っぽいものを書いていくんだから、少年雑誌に書いたって同じことじゃないか」と、執筆ジャンルの転換へつながる思考の持ち主の乱歩である。

大人ものであった「盗難」を、少年もの・子供ものに変換することも、乱歩の思考の流れにとつては、何らの障壁もなかったであろう。この当時の乱歩の気分は、立川談志流に言えば、「華麗に語ろうが、トツ／＼と喋ろうが、高い声を出そうが、低くしようが、唸ろうが、何でもいいんだ。客を夢心地にしてくれりゃあいい。ただ夢心地になる方法がいろ／＼違うだけである」となる。

また、昭和十一年当時の読者が探偵小説に理解を深めていたことは、二十面相が作中人物へ不安と恐怖を与えると描写することを、極めて自然に、可能にしていたと言える。すでに乱歩が数多く執筆していた「大人もの」に、「ドンデン返し」の手法が数多く取り入れられていて、大人にも子供にも馴染みであったのだ。次に挙げる「少年倶楽部」の「誌友クラブ」に寄せられた、少年読者の声（注三②）は、そのことの明白な証拠である。

「三月号から小林少年が出陣しましたね。僕は前に小林少年が活躍した『人間豹』を読んだことがありますので、彼がどんな人だからよく知っています。きつときつと大手柄を立てるに違いないと思っっています。四月号が待ち遠しい」（京都市 広瀬通男）

『少年倶楽部』の読者が、乱歩の「大人もの」である『人間豹』をすでに読んでいて、「子供もの」初登場の「小林少年」を「どんな人だからよく知って」いる状況。初期の作品や一部の作品を除き、当時人口に膾炙していた乱歩の「大人もの」の多くは、スリラーものであり、エロ・グロものと認識されていた。少年読者と思われる「広瀬通男」が、『人間豹』を挙げておられるのに驚くが、そのファンレターをそのまま掲載してしまった『少年倶楽部』の編集部にはさらに驚きである。少年読者たちには、乱歩の「大人もの」は大変に恐ろしいものであったはずだ。乱歩は、その時代状況を知っていたに違いない。だからこそ、『怪人二十面相』を、次に挙げるように書き出すことができたの

だ。

その頃、東京中の町という町、家という家では、二人以上の人
が顔を合わせさえすれば、まるでお天気の挨拶でもするように、
怪人「二十面相」の噂をしていました。

東京中の人が、「二十面相」の噂ばかりしているというのも、
実は怖くて仕方がないからです。

かくして、二十面相の犯行予告状は、恐怖の対象となったのである。
「盗難」という小説の賊の犯行予告は、『怪人二十面相』という小説
の二十面相の犯行予告の原型と指摘できる。

しかし、筆者が本筋に問題にしたいのは、「『人間の業』という世
にいう非常識の世界の肯定」が、乱歩の少年もの・子供もので、大人
ものよりも、より鮮明に行われることである。「盗難」の泥棒は決し
て、侮ったり、嘲笑してはならない人物であった。後の二十面相を先
取りする手口を使って、「ドンデン返し」をいく度も行い、作中人物
たちのみならず、読者をも見事に煙に巻く人物であった。

次節では、両小説に共通する犯行手口を検証する。

五 変装による犯行の手口がもたらす「悪」

― 怪人二十面相が盗んだもの ―

犯行の予告にある十二時近くになると、約束通り、「昼間の警官」
はやってくる。「奥の間」の「床の間に置いてある金庫」の前で、
「主任と警官と私と三人が車座になってお茶を飲みながら番をする」。
「主任も警官も、昼間の手紙のことなんかで問題にしていけない」。
十二時半になったところで、「警官」が「で、金はたしかにその中に
はいっているのだからね」と言い出す。「私」が、「中の札束を取り
出して見せ」と、「警官」が「なるほど、そこですっかり安心して

しまったわけだね」と、「いやな言い方で」言い、「意味ありげにニ
ヤニヤ笑っている」のだ。「だが、泥棒の方にはどんな手段があるか
もしれないのだ。君はこの通り金があるから大丈夫だと思っているの
だろうが、これは」「もうとつくに泥棒のものになっているかもしれ
ないよ」と、「警官」は「札束を手に取りながら」、さらに言葉を重
ねる。「私は思わずゾッと身震いをし」、「こうなんともえたいの知
れない凄気持」になる。三人は、「何十秒かのあいだ」、「物もい
わないでじっとして」た。「ハハハハハハ、わかつたね。じゃ、これ
で失敬するよ」と、「突然、警官は」「立ち上がり」、片手に札束、
片手にピストルを構え、そのまま部屋のとへ出「ていってしま」う。
「警官」は泥棒であったのだ(注五)。警官という社会正義の味方が、
一転して反社会の走狗である泥棒へとその役割を反転する。乱歩の言
う「ドンデン返し」が行われたのだ。ここで談志の言葉を思い出そう。

とりあえず安定していた日本人、しかし安定なんざあしよせん
人間が作ったシステムの上にあるのだから、どこかに当然無理が
生じる。それを落語は突つき、笑いにしてきた歴史がある。

この談志の言葉の中の「落語」を「探偵小説」と置き換えれば、「盗
難」という小説によって、読者が如何なる性質の不安に陥られたの
か、明瞭に理解できる。大正十四年当時の読者が、すでに大正十二
年に起きた関東大震災を経験していたことを思い合わせれば、その不安
の性質がほぼ談志の言葉に尽くされていることも了承できる。

乱歩が「盗難」という探偵小説で「突つき」、読者に生じさせた
不安の正体は、「とりあえず安定していた日本人」である読者が、そ
の「安定」が「しよせん人間が作ったシステムの上」のものであり、
「どこかに当然無理が生じる」という道理を、読者自身が明瞭に意識
することへの不安である。

またいつの日か、関東大震災のように、人間が予測もできない災
いが、きつと訪れるに違いない。それは大変に不安なことである。しか
し人間は、「とりあえず」の「安定」を得なくては、生きてはいけな
い。深刻な不安を抱えたまま、生きることは困難だからである。日常
を崩壊させ、価値観を喪失させる事態を招来し、「人間が作ったシス

テム」の「無理」を思い知らせること。これこそ、「盗難」の泥棒の行った行為なのだ。

この変装による犯罪と言う手口は、後に、二十面相のお家芸として昇華されることになる。二十面相のデビュー作『怪人二十面相』における、二十面相の最初の事件も、「盗難」の泥棒の手口を、そのまま流用していると考えて差し支えない。二十面相は、犯行の予告状を送り付けた先の家族に変装し、家族の安心を「突っつき」、犯行を成功させるのだ。

羽柴家には、今、非常な喜びと、非常な恐怖とが、織りまざるようにして、襲いかかっています。

喜びというのは、今から十年以上前家出した、長男の壮一君が、南洋ボルネオ島から、お父さんにお詫びする為に日本へ帰って来ることでした。

壮一君は生来の冒険児で、中学校を卒業すると、学友と二人で、南洋の新天地に渡航し、何か壮快な事業を起したいと願ったのですが、父の壮太郎氏は、頑としてそれを許さなかったので、とうとう無断で家を飛び出し、小さな帆船に便乗して、南洋に渡ったのでした。

それから十年間、壮一君からは全く何の便りもなく、行方さえないからなかったのですが、つい三箇月程前、突然ボルネオ島のサダカンから手紙をよこして、やっと一人前の男になったから、お父さまにお詫びに帰りたいといつて来たのです。

「壮一君」こそ、二十面相である。二十面相は、「盗難」の警官に化けた泥棒と同じく、頼もしい息子に化けて、羽柴家の警戒に当主壮太郎氏とあたるのである。そして、言葉巧みに不安を煽って、壮太郎氏に自ら「小函」を開けさせて、「由緒深い二十万円の金剛石」を奪う。そこで、壮太郎氏を楽しげに揶揄うのだ。

「そうです。あなたか僕の外にはありません」

壮一君の薄笑がだんだんはつきりして、ニコニコと笑い始めたのです。

「オイ、壮一、お前何を笑っているのだ。何がおかしいのだ」
壮太郎氏はハツとしたように、顔色を変えて怒鳴りました。

「僕は賊の手並に感心しているのですよ。彼はやつぱり偉いのですなあ。ちゃんと約束を守ったじゃありませんか。十重二十重の警戒を物の見事に突破したじゃありませんか」

二十面相は正体を名乗り、壮太郎氏にとくとくと「種明し」をする。

「僕は壮一君の行方不明になっていることを探り出しました。同君の家出以前の写真も手に入れました。そして、十年の間に壮一君がどんな顔に変わるかということ想像して、マア、こんな顔を作り上げたのです」

彼はそういつて、自分の頬をピタピタと叩いて見せました。「ですから、あの写真は、外でもない、この僕の写真なんです。

手紙も僕が書きました。そして、ボルネオ島にいる僕の友達に、あの手紙と写真を送って、そこからあなた宛に郵送させたわけですよ。お気の毒ですが、壮一君はいまだに行方不明なのです。ボルネオ島なんかにはいやしないのです。あれはすつかり、始めからしまいまで、この二十面相の仕組んだお芝居ですよ」

羽柴一家の人々は、お父さまもお母さまも、懐かしい長男が帰ったという喜びにとりのぼせて、そこにこんな恐ろしいカラクリがあるとは、全く思いも及ばなかったのです。

「羽柴一家」は、放蕩息子の帰還に「喜び」、すつかりと「とりのぼせて」いた。かつて失われた、家族の形と安定が回復したのである。しかしそれこそ、二十面相の仕組んだことであつた。二十面相は壮一君に成りすまし、「とりのぼせて」いる「羽柴一家」の心理を「突っつき」、犯行を遂げる。そして、騙されていた壮太郎氏とその家族を、改めて悲しみの底に突き落とすのだ。

「お気の毒ですが、壮一君はいまだに行方不明なのです。ボルネオ島なんかにはいやしないのです」という二十面相の言葉は、家族の喜びを無とするも可、目的を達成するためには家族のありようすら弄ぶという、稀代の悪漢の言葉だ。二十面相は言う。口調は慇懃であるが、

言っていることには血も凍るような意味合いを、十二分に含ませている。

「羽柴一家」は、「お気の毒」である。長男が「いまだに行方不明」であるから。またその長男は「ボルネオ島なんかにいやしない」。況してや、どこへいるやら、そもそも、果たして生きているやら死んでしまったのやら、さっぱりとわからない。

これは呪いの言葉だ。二十面相によって、「羽柴一家」の昨日までの喜びも、明日からの希望も、すっかり解体されてしまったのだ。

中村雄二郎は、「悪」についてのスピノザの思想を、「ずばり〈関係の解体〉であると言いつつ切っている。」と紹介する（注六）。

悪が悪とされるのは、ただ或る様態——人間も一つの様態である——の特殊な観点からであり、われわれの場合には、悪とはなにかを、人間の観点から決めているにすぎない。ここから、〈関係の解体〉をもって悪とするスピノザの考え方の射程は、〈殺人〉や〈自然破壊〉にも適用できることになる。すなわち、殺人が悪であるのは、われわれが自分たちと原理的に一致している同類の身体を侵犯し、われわれの生存がそれに依拠する基本的な関係を破壊するからである。また、自然破壊が悪であるのは、われわれ人間が生態系を破壊することによって、その秩序立った諸関係を解体し、ひいては自己の存立の基盤を失わせるからである。

中村は、スピノザの思想を説明しながら、「われわれの生存がそれに依拠する基本的な関係を破壊する」がゆえに、「殺人」を「悪」であると言う。その意味では、当然、殺人のみならず、窃盗、詐欺なども、悪であると言いつつ切れる。「盗難」の泥棒も、二十面相も、「悪」である。

「盗難」の泥棒は、「警官」に化けて、盗みを働いた。語り手である被害者の「私」は、「なんとなく居心地がよくない」ので、「もう一日も教会にいる気がしない」ので、「すぐ暇をとって出てしま」うことになる。泥棒は、「警官は社会正義の味方」という秩序を、破壊したのだ。それに伴い、「私」の属している社会の、「秩序立った諸関係」が連動して「解体」し、「ひいては自己の存立の基盤」、この

場合は教会に勤める生活の基盤を、「私」は失うことになったのである。

隣にいる人間が、「殺人」者や「泥棒」かもしれないと疑いながら、安心して生活できるものではない。役割反転が、不意に行われる世界に、人間は耐えられないものではない。「盗難」の泥棒は教会から金を盗んだだけではなく、「私」の「生存がそれに依拠する基本的な関係を破壊」し、奪い去ったのだ。

二十面相の場合も同様である。彼は、「羽柴一家」の「生存がそれに依拠する基本的な関係」であるところの家族、家族という「人間が作ったシステム」とその「安定」を、「破壊」したことになる。二十面相の犯行によって、一番に頼りと思つた長男が消失し、一番に恐れた二十面相が顕れたのである。

一体、何を信じたらよいのか。役割が次々と反転したり、勝手に消滅する世界で生きていくことを、壮太郎氏とその家族、さらに言うならば読者たちは、手酷く思い知つたのだ。希望は絶望へと反転し、「秩序立った諸関係」は「解体し」、「ひいては自己の存立の基盤を失」う。その元凶が二十面相と名乗る、「変装が飛切上手な」怪盗なのである。

以上、解読してきたように、犯行予告の相似と同様、「盗難」という小説の賊の犯行によつてもたらされた「悪」は、二十面相の犯行によつてもたらされた「悪」と同質のものであり、その原型と指摘できる。そして両者の盗んだものが、「生存がそれに依拠する基本的な関係」、社会秩序という「人間が作ったシステム」による「安定」であったことが明らかになった。怪人二十面相が盗んだもの、それは人間が生きていく上で必要不可欠である、人間同士の信頼関係であつたと言いつつ切ることができる。

なおこれ以上、「盗難」というテキストと『怪人二十面相』というテキストを、具体的に読み解く必要はほとんどないといつてよい。「盗難」という小説のその後の物語は、語り手の「私」と「読者」とを、「警官」か「泥棒」か、「加害者」か「被害者」か、「本物の金」か「偽札」か、「ドンデン返し」の繰り返して翻弄し、「私」も「読者」も宙吊りで不安な心理状態に置かれたまま終わる。乱歩自身による作品解説を、もう一度引く。

どこか落語を連想させる軽い読物である。私は昔から、探偵小説と共に落語が好物であった。両方ともドンデン返しと「落ち」のある点が近似しているからであろうか。この作にはその私の二つの好物が混じりあっているように思われる。

乱歩は「軽い読物」であると言っているが、本当はどう考えていたのか。「探偵小説と共に落語が好物」と告白し、「この作にはその私の二つの好物が混じりあっているように思われる」と、極めて控えめであるが、自信のほどを明かしている以上、額面通りに「軽い読物」と捉えることは、このテクストを読み解く際には危険かも知れない(注九)。

少なくとも、登場人物の役割反転という「ドンデン返し」や、人間の業を肯定する「落語」的な要素を多分に持つ物語は、その意匠は軽く見えたとしても、一筋縄でいかない難物である。「二つの好物」を駆使した乱歩の初期の傑作の一つとして、数えることが出来ると確信する。

また『怪人二十面相』は、「盗難」を原型としているので、「盗難」同様、「ドンデン返し」と「落語」的な要素を多分に持っている。物語は、以上述べてきた内容のほぼ同種の反復である。それゆえに、先に述べた通り、本稿においては、続く物語自体を詳細に読み解く必要はほとんどないのである。

さて前節末尾で触れた通り、「『人間の業』という世にいう非常識の世界の肯定」が、乱歩の少年もの・子供もので、大人ものよりも、より鮮明に行われたことに触れておく。

二十面相は、「イヤ賊自身でも、本当の顔を忘れてしまっているかもしれない。」と噂される人物だ。

二十面相はその後、様々な者に化ける。『妖怪博士』(注七)では「私立探偵殿村弘三」に、『奇面城の秘密』では警視庁内で堂々「山本警視総監」に化ける。果ては、人間ではない異形の者である「青銅の魔人」にも、「透明怪人」にも、「宇宙怪人」にも、「夜行人間」にも化け、奇怪極まる姿を少年探偵団の前に晒し続けることになる。

ここに至っては、二十面相は「『人間の業』という世にいう非常識の

世界」の住人となったと断言せざるを得ない。社会秩序を破壊し、東京を恐怖の底に落とし込んだ怪盗は、役割消失と役割反転によって得られる何かを、追い求める業を生きるようになった。その業とは何か、次節ではこの点について考察する。

六、常に未来におかれるアクセント

二十面相が他者に化ける。江戸川乱歩没後半世紀、今や、読者には当然のこととして受け入れられている。すでに国民的にも周知のこととして定着しているとも言えよう。しかし、「化ける」とは一体、どういった行為なのであろうか。

前節の末尾で、二十面相が化けた者をいくつか挙げた。「少年探偵シリーズ」で、二十面相が化けた者は、次の三つに分類することが可能である。

- ① 「私立探偵殿村弘三」や「山本警視総監」に代表される、特定できる個人に化けるケース。
 - ② 特定はできないが、「警官」や「新聞記者」等、その職業に従事する者に化けるケース。
 - ③ 「青銅の魔人」や「透明怪人」に代表される、架空の(想像上の)怪人・怪物に化けるケース。
- ①と②は、たとえ動機は非常識なものであっても、少なくとも人間に化けるのであり、特定される個人やある職業従事者に化けて、読者が現実存在する日常世界へ忍び込むことを目的としているケースが多い(注十)。その際、「化ける」ことは、「変装する」ことだ。
- ③は、①と②とは、趣を異にする。「青銅の魔人」や「透明人間」は、人間ではない異形の者たちだ。この場合の「化ける」ことは、「仮装する」ことである。「変装」と「仮装」の違いを、『新明解国語辞典第五版』は次のように説明している。

【変装】—する 何かの必要から別人のごとく、髪・顔の様子や

服装を改めること。また、その改めた姿。

【仮装】―する (一)その場の遊びとして、奇抜な扮装を凝らすこと。「法令用語としては、第三者を欺くための虚偽の意思表示の意に用いられる」「―行列・―舞踏会 (二)応急の装備であること。「―巡洋艦」

『新明解国語辞典』での語釈を見れば、先に挙げた二十面相の「化粧者」を、①・②と、③に分けた際の括り方が、「変装する」と「仮装する」で区別した結果であることに首肯していただこう。

①と②の場合、二十面相は「何かの必要から別人のごとく、髪・顔の様子や服装を改め」ている。窃盗のために、また逃走のためになど。これは、大正十四年に執筆された「盗難」の泥棒から、直接に受け継がれている二十面相が「化ける」動機である。二十面相は明らかに非日常的な存在であるが、この動機は彼が日常世界で活動するためには必要不可欠の、現実的な動機である。

この動機による二十面相の行動、すなわち変装することが、東京市民を現実的な恐怖に落とし込むのは、次の理由によると考える。非日常的な存在である二十面相が、作中人物たちや読者の住む日常世界に、非日常的な存在者とは「別人のごとく」、侵入する、もしくは侵入するかもしれない、さらにすでに侵入しているかもしれない、という不安を東京市民が抱くからである(注十一)。非日常的な存在である二十面相は、談志流に言えば「人間が作ったシステムの上」の「どこかに当然無理」がある「安定」を、覆すかも知れない存在であるからだ。だからこそ、怖いのだ。

③の場合、二十面相は架空の怪人・怪物に「扮装を凝らす」。怪人も怪物も、非日常の世界、あえて言うならば「非常識の世界」の住人たちである。もともと非日常の存在である二十面相が、さらに突飛な架空の者に化けることで、日常の世界を惑乱させる種になることが多い。それはあたかも「その場の遊び」のようだ。ミハイール・バフチンは、「仮装」に関して次のように指摘している(注十二)。

民衆的・祝祭的娯楽の必要欠くべからざる要素は仮装であった。

つまり衣裳と自分の社会的イメージの改新である。もう一つの本質的要素は上の階層のものを下へと移し変えることであった。道化が王であると宣言され、愚者の祭りでは道化の僧院長、司教、大司教が選出され、教皇直属の教会でも、道化の偽教皇を選んだりしたものである。この道化的階層秩序のメンバーが荘厳ミサのお勤めをするのであった。

二十面相の「仮装」は、「遊び」の要素が強い。乱歩の晩年に近づくにつれて、小林少年をはじめとする少年探偵団団員と、遊んでいるように見える傾向は、次第に顕著になってくる。二十面相の「仮装」によって跳梁跋扈する怪人・怪物は、明らかに「非常識の世界」の住人である。その世界は、「民衆的・祝祭的娯楽」の場であり、その実現のため「必要欠くべからざる要素」である「仮装」は、二十面相のお家芸だ。二十面相はその意味で「道化」の「王」であり、小林少年をはじめとする少年探偵団団員も「道化的階層秩序のメンバー」だ。なにしろ「少年」なのに「探偵」なのだ。

「盗難」や『怪人二十面相』の、「ドンデン返し」による深刻な「秩序立った諸関係」の「解体」を恐れる「不安」に満ちた世界は、「道化的階層秩序」によって「改新」されて、深刻な事件が「上の階層のもの」(注十三)から、「遊び」という「下へと移し変え」られる。それゆえに先に指摘した通り、「『人間の業』という世にいう非常識の世界の肯定」が、乱歩の少年もの・子供もので、大人ものよりも、より鮮明に行われることになったのである。ミハイール・バフチンは、少年と遊び(祝祭と言い換えても、よい)に関して次のように指摘している(注十二)。

(《主権は小児の手中にある》)アクセントは常に未来におかれている。未来のユートピア的性格は、民衆の祝祭の笑いの儀式や形式は固有なものなのである。

「少年探偵シリーズ」においても、「アクセントは常に未来におかれている」。それは、『怪人二十面相』のラストシーンと同一のシチュエーションが、ほぼ全作品において、くり返し描かれることによ

って保証されているのだ。

「オオ、小林君」

明智探偵も、思わず少年の名を呼んで、両手を広げ、駆け出して来た小林君を、その中に抱きしめました。美しい、誇らしい光景でした。この羨ましい程親密な先生と弟子とは、力を合わせて、遂に怪盗逮捕の目的を達したのです。そして、お互いの無事を喜び、苦労をねぎらい合っているのです。

立並ぶ警官達も、この美しい光景にうたれて、にこやかに、しかし、しみりした気持で、二人の様子を眺めていました。少年探偵団の十人の小学生は、もう我慢が出来ませんでした。少年頭をとるともなく、期せずしてみんなの両手が、高く空に上がりました。そして、一同可愛らしい声を揃えて、繰り返し繰り返し叫ぶのでした。

「明智先生バンザイ」

「小林団長バンザイ」

「バンザイ」すなわち万歳を、『新明解国語辞典第五版』は次のように説明している。

【万歳】—する ①(一)いつまでも生き、長く栄えること。「千秋」(二)めでたいこと。喜ぶべきこと。「うまくいけばーだ」(三)「口頭」どうにもしようがないこと。おてあげ。最後。「もうーだ」②(感)「両手を勢いよく上げる動作を伴って」祝福の意を表す時、また勝負に勝った時(おおぜいで)唱える言葉。

「美しい、誇らしい光景」は、大人であっても、「にこやか」な、「しかし、しみりした気持」にさせた。「少年探偵団の十人の小学生は、もう我慢が出来」ず、「バンザイ」と叫ぶ。

この少年たちの叫ぶ「万歳」には「いつまでも」「長く栄えること」、それを「祝福」する気持ち、二十面相との「勝負に勝った」ことへの喜びが表されている。しかし、その祝福と喜びは、「明智先生」と「小林団長」へのみ贈られている言葉では、決してない。「少年探偵団」

全員と、それを見守ってきた少年である読者たち全員への祝福の意であったはずだ。

例えば、『奇面城の秘密』のラストシーンは、次のようなバリエーションとなる。

ポケット小僧は、そこまでいうと、感きわまったように両手を上げました。

「明智先生、ばんざあい。小林団長、ばんざあい……」

すると、小林少年も、目に涙をうかべながら、これにこたえて叫ぶのでした。

「少年探偵団、チンピラ隊、ばんざあい！」

「少年探偵団、チンピラ隊、ばんざあい！」と、小林少年が叫ぶ。このラストシーンは、「アクセントは常に未来におかれている」この「少年探偵シリーズ」の、「未来のユートピア的性格」が如実に表現された箇所だと考える。

少年たちは、互いを祝福し、互いに喜びを分かち合っているのだ。現実の味気ない世界に生きる大人たちが「にこやか」な、「しかし、しみりした気持」にさせられる、「美しい、誇らしい光景」をこの世に創出できるからこそ、少年は少年たり得るのだ。

それは「祝祭」だ。現実の世界において「上の階層のもの」とされてきた大人が、二十面相の事件解決には無力である。そして、「少年探偵団、チンピラ隊」の活躍という「非常識」な出来事によって、未来へのアクセントは、少年という「下へと移し変え」られることになる。「明智探偵」は、「少年探偵団、チンピラ隊」の後見役に過ぎない。「明智探偵」は「祝祭」の裏方である。

「民衆の祝祭」「の儀式や形式」が「固有なもの」であることは、バフチーンの言葉からも明らかであろう。それゆえに、乱歩は飽きもせず、「万歳」によって作品を閉じるという行為を、延々と続けたのである。

この未来志向の「祝祭」の仕掛け人である二十面相は、永遠に新たな「仮装」をして、少年たちの前に立たなくてはならない。それこそが、二十面相の「人間の業」である。二十面相が仕掛け続けること

によつてのみ、少年たちによる「美しい、誇らしい光景」が現前し、その「美しい、誇らしい光景」は「改新」され続けることが可能となるからだ。

二十面相が追い求め続けたものは、少年たちの活躍によつて創出される「未来のユートピア」、その「美しい、誇らしい光景」であったのだ。だからこそ、二十面相は不滅なのである。

七. おわりに — ふしぎな人の自己認識 —

最後に、二十面相の到達した境地について、少しだけ触れておく。昭和三十三年から三十四年にかけて執筆された「ふしぎな人」に登場する「二十めんそう」についてである(注十四)。『江戸川乱歩全集第二十一巻 ふしぎな人』の巻末の註釈をご覧いただきたい。

※58 「なにつ、あけちたんていと小林しようねんがやって来たつて」 まだ何も悪いことをしていないうちに、二十面相は追い詰められてしまう。それとも、他のところでも悪いことをして、林の名前では近所の子どもと遊ぶだけだったのだろうか。

この註釈は出色の出来であると思う。「まだ何も悪いことをしていないうちに」「追い詰められてしまう」二十面相は、おそらく、「近所の子どもと遊ぶだけだった」のであろう。

所謂「悪役」として定着した「二十面相」という「仮装」、それを演じ続けることを、彼自身、よしとしている感すら漂う。「何も悪いことをしていない」とも、まったく問題がない。そのようなことは問題とすらならない。彼はなにしろ、唯一無二の怪盗「二十面相」として、世にも「ふしぎな人」として、現実の世界と読者に受け入れられているのだから。そして、彼は遊ぶのだ。少年たちとともに、少年たちの未来を信じて。

注

注一 本稿で使用した「盗難」のテキストは、日下三蔵編『江戸川乱歩全集短篇I 本格推理I』(ちくま文庫、一九九八年)に拠った。なお、「本稿一」はじめに「で触れた乱歩の簡略な年代記は、同書に収められた「著者による作品解説」に拠り、筆者が纏めたものである。

注二 立川談志、『新釈落語咄』、中央公論社、一九九五年。第十四回『寝床』にある落語論である。

注三① 本稿で使用した『怪人二十面相』のテキストは、『江戸川乱歩全集第一〇巻 大暗室』(光文社文庫、二〇〇三年)に拠った。

注三② 『江戸川乱歩全集第一〇巻 大暗室』解説「対照的な悪の暗躍」(山前譲)に拠った。

注四 『江戸川乱歩全集第二十八巻 探偵小説四十年(上)』(光文社文庫、二〇〇六年)に拠った。引用箇所は「昭和十一・十二年」の章。

注五 この「警官」が本物であったか、偽物であったのかは、作中では明らかにされない。本物の警官が、その場のその瞬間に「泥棒」に宗旨替えをしたのか、もともと「泥棒」であったものが警官に化けていたのか、それは不明である。このことは、読後、読者へ宙吊りな不安感をもたらすことに成功していると言える。

注六 中村雄二郎、『術語集II』、岩波新書、一九九七年。

注七 一九三八年執筆。

注八 一九五八年執筆。

注九 中井英夫は、乱歩の自作への批判と嫌悪について、下記のように記している。「(乱歩自身による『化人幻戯』に威勢よく断言している。むしろこちらで「そんなことはありませんよ、先生。毎月とても楽しませていただきましたよ」と慰めたくなるほどに、乱歩の自作への批判と嫌悪は『一寸法師』の昔から手きびしく容赦のないものだった。」この中井の指摘から考えれば、「盗難」の自身による作品解説は欠点の論いも一切書かれておらず、この小説への自信が十分に窺える一文であると言える。敢えて言うならば、この作は乱歩の密かな自信作であった可能性が高いと判断する。

注十 この場合、忍び込むということは、紛れ込むとほぼ同意である。

例えば、明智小五郎や警察に追い込まれた二十面相が、「警官」に化けて逃走する。その際の化ける行為は、非日常の存在である二十面相が、日常の存在である「警官」に紛れ込むことよって、逃走という目的を達したことになる。非日常の存在が、日常の存在に忍び込む、といったことになるから、この逃走は可能となるからだ。

注十一 怖い探偵小説をすでに十分に享受している当時の読者たちは、「盗難」の時代の読者たちとは異なり、犯行予告状を笑わない。犯行予告状は、作中人物や読者の不安を、一層煽る働きをするアイテムへと変化していることを指摘しておく。

注十二 ミハイール・バフチーン、川端香男里訳、『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、①七十六頁、せりか書房、一九八〇年。時代や洋の東西を異にするが、バフチーンの指摘の数々は、民衆文化を考える際に示唆に富む。なお、バフチーンの視点の、テクスト解析への有用性については、本校創造工学科基盤教育グループ窪田眞治教授から、様々なご教授をいただいた。

注十三 深刻なことは高級なことであるという認識は、確実にこの世に存在する。我が国においては、そのような認識が、純文学・中間小説・大衆文学の区別を生んだという、歴史的経緯がある。深刻なものには「上」、笑いを誘うものは「下」という認識の構造は、「能」と「狂言」などの関係など、枚挙に暇がない。

注十四 『江戸川乱歩全集第二十一巻 ふしぎな人』（光文社文庫、二〇〇五年）に拠った。